

長休寺スカウト

4団・38団
合同会報



善財童子

長休寺スカウト協議会

第 2 号

昭和60年1月1日

1985

ごあいさつ

会長 三浦 正

昭和47年春、小山さんのご紹介で長休寺の門をたっさき、小川先生にお会いしてから、早くも13年、無理をお願いして次男を38団カブ隊「しか」から入隊、11月の晴れた日松ヶ崎の山中の入隊式、今でもその頃の事が鮮明によみがえる。昔の事を言うと皆様におこられるかも知れないが、当時5組ある隊集会は、スカウト隊にまけないほど多數の育成会員が参加し、一緒に走り廻ったものだった。

4団ボーイ隊に上進してからは指定されたキャンプの見学日に、父兄が隊をなして参加した。その度毎に、家の中ではみられない子供達の生活、活動を見、成長過程の子供の変化に驚くと共に満足感を味つて来た。

何時の頃からか北山地区の役務をお受けかかり、BS運動・組織もわからぬまま、諸先輩の語りを聞き、行動を見ているうちに、教育方法、その組織が少しだけ理解出来る様になつた。

しかし、地区も連盟も足を洗わしてもらい昨年から、育成会長をお受けつかつて、勉強不足と言うか、頭の差と言うか、ともかくにもわからない事だらけ。何時も小川先生の足を引張る事になり、誠に申し訳ないと痛感している次第です。

ボイスカウト運動が奉仕をぬきにして考えられない現状から、スカウト達が安全に、

活発に隊活動を展開出来る様、皆々様のご協力とご奉仕をお願いするのが仕事だと考え、縦横の連絡係に徹している此頃であります。

昨年初めより協議会報の複刊の話が出て一年、複刊した以上は続けようとした意志をもって、ご挨拶とさせて戴きます。

力バスカウトのこと

会長 中川 恵造

もう二十五年も前になりますが、東京駅に行つたついでに東京タワーに登つて見ようと国電に乗りました。初めて行く処だし、しかも一人ぼっちだし、心の中では少なからず不安がつのります。それを抑えるためタワーに出来るだけ近づいておこうと電車の窓から塩(新橋)だたかな? 本当はもっと近い駅が有りました)で降り、これならバスやタクシーに乗る程の事も無いと、ついそこに見えるタワーに向つて歩き出しました。もちろん

ぼくは、隊集会で一番大きいものは、ハイキングです。

ぼくは、ふとつているし、お茶もたくさん飲んで、歩いてから、あせがたくさんで、すごくかれます。けれどみんなといっしょに歩きます。だから隊員ややすいさんに、「がんばりややな。村田君は。」といわれます。

一番好きなものは、しゃえいともちつき大会です。しゃえいはしゃえいでも夏のしゃえいの方がいいです。き間もながいし、いろいろなことをいっぱいするからです。

もちつき大会は、もちが食べられるし、もちろんつかしてくれるし、とってもおもしろいのです。前のもちつき大会では、やきそばいの方が多いです。き間もながいし、いろいろなことをいっぱいするからです。

からです。前のもちつき大会では、やきそばいも、やさしく、大きです。キャンプファイヤーのときは、おんなんじ「しれ」をいつ、ぼくは、「わたしはだれ、ここはどこ」とゆうのがすきです。スカウトとかけをして、隊長がまたらかえりに、にもつをもつとかの、くそくをして、隊長がまたらかえりに、にもつをもつとかの、やくそくをやぶります。

そんな、隊長がぼくは、すきです。

次年も、さきたさんが隊長になつたらいいなあとおもいます。

“スカウティングの道”

小川玄諦

あるけ あるけ 道を求めて 坂道もよい ひら道もよい 道なき道も 一步歩く あるきつづける	ふみまよえる道も いつしか 歩むべき道を 見出す 一歩一歩を 味いつつ スカウトはあるく
--	---

年 の 始 め に

長休寺スカウト協議会
会長 小川玄諦

12月の年の暮、あれもこれもと締めくらねばならないあわただしい日日も、一夜明ければ、初詣、御年玉、新年会、等々、又、あわただしい日日であるけれど、新年の年の始めに交す互礼の「おめでとう」と祝い合える儀礼はやはりいいものである。家庭に於ける儀礼は殆んど無くなつて来ているだけに、昨夜の煤掃き、今日は飾り、新衣を着て、年賀の来客を待つ、何となく、心新的なものである。

そして、いつもながら、今年こそとの願いをほのかに胸に秘めて……、スカウトにあっては、やはり「ちかい」にたどりつく。

一、 おのれこそ われならで ととのえし まざるもの	おのれのよるべ だれによるべぞ われのちからに いざこにあらん	二、 みのりこそ のりならで とこしえに みのりこそ	われらのよるべ なにによるべき わかることなき われらのよるべ
-------------------------------------	--	-------------------------------------	--

新年の年を迎える元旦は、スカウトが、何もわからぬ、知らぬままの入隊の日の、あの素直な姿にかえる日ではなかろうかと、ふと思う。見なれた空も、初空といい、使いならした毎日使う水も、若水という、何の変りもないのだけれど、すべて新しい心で接しようとする素直な感受性によるものであろう。そんなことを思うと、やはりスカウトは、豊かな野性を持った自然人である。あのキャンプの夜空の星の輝きの美しさを讃嘆し、宇宙の無限に感動し、幾度も驚きの言葉、うれし涙を流し感激した事を思い出す。あの研修所、実修所での閉会式、感激の涙の別れであった。そこには、人間の持つ野性、本当に純な感受性に触れ合うものがあるからであろう。

創刊号より八年目の第二号である。その間の背景の変化はめまぐるしく、それに対応する感覚の鋭敏さ、また意識の過剰もさることながら、時代は、学ぼうとすれば学べる時代、それに反して、知ろうとしている自分自身について知ることが出来ない時代、言えば、自己を統べる魂の不在と、いわれています。こんな時代の中にあって、スカウト訓育は、自分の経験していることを基にして、自分で、考えて行くことを大切にします。自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の頭で考えることを非常に大切にします。これが指導の根幹でもあります。限られた紙面も書きました。

本年も、育成会、委員会、また指導者の皆様の御指導と御奉仕をお願いし、団のよき支え棒としてスカウトの育成によろしくお願い申しあげ、純な感受性のある団として、新玉の年の始めの歩みにいたしましたく、新年のごあいさつといたします。

カブスカウトの思い出

38回 カブ隊一組 青山 豊

ぼくがカブスカウトに入つてから三年になりました。昭和56年の12月にかり入隊しました。

初めはいつたいカブスカウトって何をするのだろう、おもしろいのかな、入つてすぐによめたくならないかなといろいろ想像して不安に思つていました。

でも、カブスカウトはすごく楽しいとわかつてほつとしました。はじめての隊集会は雪中ハイクでその隊集会でうちの父は、組のデンドットもしました。寒さのきびしい北山を歩き続けるのはすごくつかれることです。ぼくも、と中、歩いているとすごくつかれましたが、「くま」と「しか」のスカウトはなれているせいかつかれた顔を見せません。

ぼくもほかのスカウトに負けないように必死になつて歩き続けました。リーダーたちの

すがたが見えた時はやっと終わつたと雪の上でゆっくりと体を休めました。隊集会のゆう勝が一組になりました。初めての隊集会で初めてのゆう勝を経験したぼくはすごくうれしかつたです。

それに印象に残るのは毎年の夏キャンプ。ぼくがうさぎの時は笠ヶ山で、しかの時は大江山、今年はあやべのお寺でありました。

ぼくは今年の夏キャンプが一番、よかったです。組長がぼくなのですごくはりきっていました。それにぼくたち一組は去年ま

で二年連続総合ゆう勝しているのですから今年の夏キャンプも絶対にゆう勝しようとみんなでちかい合いました。

近くに川があつて泳げることもできるし、小さな小川には魚もたくさんいます。いなかなので水を大切にしなければいけません。末吉副長から水コップ一ぱいでできるせん面の

しかたなどを教わり、少しかしこくなつてとくをしました。それに、ぼくが楽しみなのは、組長・次長会議です。組長・次長会議ではおかしがります。それが毎日の楽しみでした。

三日目には野外料理もありました。川にニジマスをにがしてつかみどりをするのです。

一度つかまえても、体の表面がぬるぬるしているのですぐにげられてしまいます。けつきよく、三びきつかまえました。次は、ニジマスのはらわたをぬきとります。やつたこととのなかつたぼくはなんだかやる気になりますせんでした。次は、ニジマスを塩焼きにします。松本道典君がお手本をみせてくれました。

だいぶ時間がかかりそうです。ぼくもやつてみました。やき上がるとすぐ食事の準備をし

ます。食事を終えてかたづけをしてまつ暗になりました。食事を終えてかたづけをしてまつ暗になりました。

そしてとうとう四日目。ぼくはすごくドキしていました。一組はゆう勝できるかなと心の中で思つていました。セレモニーの最初はスケッチのひょうしょう式です。スケッチ賞は船川君、スケッチグランプリ賞は、なんとぼくに選ばれました。そういうわけで一

雑感

38回一組 D・M 西脇香代子

組が総合ゆう勝にかがやきました。これで一年もお別れです。カブスカウトのおかげでぼくもすいぶん成長できだし生活などに役立つことなどいろいろ教わりました。

最後にカブスカウトのリーダーのみなさん、ありがとうございます。

「デンマザーこんにちわ」「デンマザーお早ようございます」カブスカウトのモットーは「いつも元気！」で始まり「いつも元気！」でスカウト達は元気に帰つて行きます。「デンマザー、デンマザー」と呼んでくれる可愛いスカウト達にデンマザーとしての役務を果たして遂行して来ただろうかと考えさせられます。今迄、家庭の一主婦だった私としては何かしら異質な特権意識のよう、制服を着ることも最初は婦人警官のようで恥ずかしく抵抗も感じましたが今では制服を着ることで主婦とデンマザーの切り替えができるようになりました。夫々、デンマザーのタイプは違い、夫々、スカウトへの接し方も異なるのは当然です。可能性をいっぱい秘めた子供は、これから花開いていくのですから自分だけの

から念じ三八の益々の発展をお祈り申し上げます。

ボイスカウトと私

四回 カブ隊々長 崎田 貢祐

私がボイスカウトに入隊したのは今から十一年前の昭和四八年です。当時私は小学五年生、ボイド隊からの入隊でした。本当は小学校四年の時、ボイスカウトという組織を知ったのですが「カブ隊で入隊してもすぐボイド隊に上進するので待つた方が良い」と言わされて一年間待ちました。

いよいよ仮入隊式の日がやってきましたのが、この年の入隊者は、私を含めて八名、その内カブ隊からの上進者は六名いました。カブ隊からの上進者は全員カブの制服に黄色のチーフをビシッと付けていました。私ども一人のボイド隊からの入隊者は、私服でチーフはふろ敷を二つに折つて巻いた物を付けていました。それにソングも始めて聞く歌ばかりで、カブ隊上進者が元気よく歌っているのに私は口をパクパクさせるばかりでした。でも、隊長さんのおかげで、私にボイスカウトを紹介してくれた人と同じ班にしてもらつたことや、班員のみんながとてもやさしくいい人達ばかりだったことで不安はありませんでした。

しかしこんな私でも一度だけ泣いたことがあります。最初のうちにみんなとてもやさしかつたのですが上進して制服を着ると「一年目」と言うことで、よく仕事をいいつけられ



ました。一年目の夏キャンプの時です。私の一年目の時はたまたま例年なら滋賀県ぐらいなのに、新潟県へ行きました。車泊を含めて七泊八日という日程でした。まだ小学五年の私は、春のキャンプで慣れたとはいえ、そんなに長く親と離れたことはなかったので不安でいっぱいでした。キャンプも半ばの四日目の時です。ふとしたことから同年代の一年目のスカウトの人とケンカになり、ホームシックも限界だったので泣き出しました。今、思えば「なんでホームシックなんかにかかるんだろう」と思いますが、その時は帰つたくて、帰りたくてしかたありませんでした。

現在、隊長として偉そうにしている私も昔はこんなスカウトでした。当時いつしょに入隊したスカウトはどうしているかと言いますが、今は引つ越しや退団等で全員やめてしましました。スカウト活動は出席しなければ何も楽ししくありません。習いもの、塾、野球等を習っているスカウトも多いと思いますが、うまく時間を作つて出席し、末は隊長いや地区コミッショナーぐらいに目指してガンバッテほしいと思います。

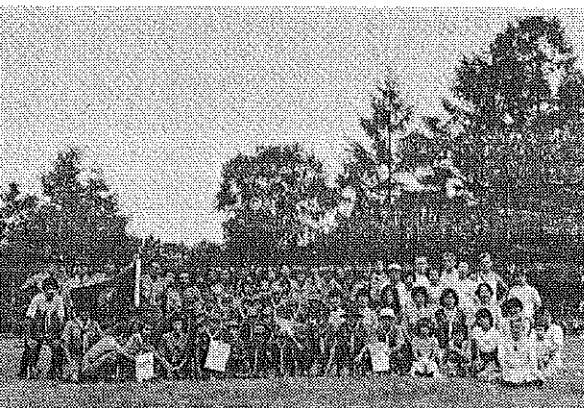
この一年をふりかえって

38回カブ隊副長 和田喜興太

最近、特に子供の教育、僕について取り組んでいた。特徴を出すようにしているようだ。

国は教育改革について本格的に取り組んでいた。僕は教育改革について本格的に取り組んでいた。高校教育について、特色を出すようにしているようだ。

僕は教育改革について本格的に取り組んでいた。高校教育について、特色を出すようにしているようだ。



いまのままで、なんか、だめな班長で、長所がなく、短所ばかりあるみたいだけれども、ぼくにも、一応長所は一つぐらいあります。それは、班を、たのしく、明るくすることです。

まず、班をおもしろくしなければ、班員も班集会にくるのが、いやになるでしょう。おもしろなければ、班員から、きらわれるでしょう。でも、やるとときは、きびしく、面白くなるときは、面白くしたいと思っています。

きびしく、きびしくすぎたら、班集会も面白くありません。ぼくもきびしくすぎたら面白い、よきな、班を、つくることにどりょくします。

自分、現在の姿を、正確に知るということは、簡単な様で最もむずかしいことの一つである。単に自分で考えている自分と、他人から見られている自分とは、大抵違うものである。が、それを融合して見ることのできる場が、ボーライスクウト活動ではないだろうか。

と言うのも、全ての他人との接触の中で、最も、生の姿をさらけ出す場の一つが、ボーライスクウト活動ではないでしょうか。ボーライスクウトの夏期キャンプ一七日間一がいい例ですが、この七日間の間に、スカウトは、誰かしらから、様々な忠告を受けます。それが、たとえ、誓の言葉であれ、悪口であれ、後での反省となつて現われてきます。時には、落ち込んだり、ボーライスクウト活動 자체がいやになることもあります。

「富士スカウトに挑戦して」

38回RS 服部 憲一

僕は、スカウト運動の目的を説明する時に、「人格」という言葉をいつも用いたそうです。崇高な理想、独立独行の精神、義務感、不屈の精神、自尊、他人に対する尊敬—これらが一緒になる」という風にも考えられます。彼は、こういう事を主張していたと言っていますが、これは、現在のスカウティングにも通ずる立派な主義でしよう。班長として、班員をして班に貢献する。つまり、個々に与えられた責任を通して、よりすばらしい「人格」を形成する—しっかりした、けじめのある人間になる」という風にも考えられます。いく、とゆうことは一朝一夕にして、出来る事ではありませんし、又、簡単に、どのような「人格」が、良いとも言えません。

しかし「自己を知る」ことは可能であり、又それにより「しっかりと人間」になつていくのは可能です。私は、ボーライスクウト活動が、そういうことを覚えている。そのころは、進級のこともまだ知らなかつた。ただ三之助(中村)さんがスカウトでアメリカへ行かれたということを聞いていたので、がんば

いた。荒削りの人間をまるやかな人間味のある人に対する術であると思う。基本的な大切な術である。スカウト活動も私は、この術の一つであると理解している。第一線とこれを支える所、これがうまく噛み合つてこそ、一十人が三にも四にもなると思う。

僕は「甘い」と「辛い」のと「甘い」と「辛い」は比較的簡単で自分がいい顔をしていればよいが、「辛い」の自分も厳しく、他人にも厳しくすることである。世の中には自分に甘く、他人には厳しい人がいるが。「甘い」のは規律がなく、「辛い」のはチームワークがない。この両者をうまく分けられたら最高だなと痛感している。

また、親の背をみて子は育つ」というがこれは正解であると思う。しかし私など俸給生者はどのように背を見せたらよいのか。あ

今、ぼくたち四回ボーライスクウト隊は十三人というとても小人数でやっていますが、今年から三班にもどり、一班四人という位です。それでも今、四年目がいないという厳しい人数でやっています。

ぼくが、班長になる前は二年目で次長になりました。このあいだ四年目の人がぬけて、ぼくたち二年目と一年目だけで三年目がいない隊になってしまったのです。その人数で上進式をむかえてぼくたち二年目が三年目になり、最上級になってしまった

結果としてそれが立派な社会人を生みだすのであると思う。この一年をふり返ってみて赤面しながら筆ではなかろうか。

規則正しい生活こそ、スカウト活動の神髄ではなかろうか。

この一年非常によい経験をお与え下さいました各位に深く感謝すると共に、今後の御多幸をお祈り致します。

三年目の班長と四回

38回ボーライスクウト 若城 賢治

38回ボーライスクウト 二条場 健浩

班長とは、責任感がいる。ぼくには責任感がない。でも責任感がなければ、キヤンブは、なあざら、ハイキングでさえ行けません。これからは、春キャンプ、夏キャンプ、ハイキングといろいろあるが不安だけど、その前の班長・その前の班長もぜんぜんそがしそうな顔をしなかつたけどぼくがなつてみて始めて、しんどいということがよくわかりました。三年目でも、四年目とかわらない班長になります。そのためがんばりたいと思います。

ぼくが班長に選ばれた、理由は、進級が一番早いから、又、力があるから、又、すいじがうまいからでもなく、どれにもはいりません。これからも、進級が早いから、すいじがうまいからなどは、いくらでも、これからできます。そのためがんばりたいと思います。

ぼくが班長に選ばれた、理由は、進級が一番早いから、又、力があるから、又、すいじがうまいからでもなく、どれにもはいりません。これからも、進級が早いから、すいじがうまいからなどは、いくらでも、これからできます。そのためがんばります。

ればアメリカへ行けるということだけは頭にあった。スカウト活動でアメリカへ行くといふことは一応、幸運にめぐまれて実現したが、努力のたまものではなかつたので、今度は自分の力で行きたい。

今までに苦しいことはたくさんあつた。はじめて苦しいことを経験したのはボーア一年

目の夏キャンプだった。親がいなくても、何でも自分でできると思つたけれど、そんなにあまいものではなかつた。荷物は重たいし、朝は早いし、ごはんは自分で作らねばならない。そして、何よりもつらかったのは、水が思い通りに使えないこと。朝夕の給水時間にためておいた水を大事にすこしずつ使わなければすぐなくなる。水の大切さがはじめわかつた。おまけに台風まできた。当時はたいへんだっただらうと思うが、今はいい思い出として残つてゐる。それ以後、クラブとかち合つたりしてやめたいたと思うことはあつたけれど、ほんとうに続けてよかつた。

ぼくが今までやってこれたのは、良い指導者に恵まれていたからだと思う。いろいろ、ボーアスカウトのおもしろさや、自分たちでどれだけのことができるのかも教えてもらつたし、またいろいろ助けてもらつた。今までぼくが受けてきた恩をこれから、しっかりと返して行きたい。

今年のシニア大会は受験のことを考えて参加しなかつたし、今も受験のことばかりで、あまりスカウト活動ができていないので、その分も受験がおわつてからとり返していきた

い。ローバーの活動は興味もあるし、やりがいのある活動なので、たいくつすることもなぐがんばつていけると思う。三十八団はたいへん居心地がよい。この状態で、ずっと団が栄えていくよう努力していきます。

「僕とハウス長休」

ボーアイ隊副長 西村 浩行

その昔、僕がまだカブスカウトの頃は長休寺の裏庭にはハウスはなく、その代りに鉄棒や砂場があつた。コンクリートの屏も木の柵だつた様な気がする。今から思えば雨の時はどこで集会をしていたのやら、よく思い出せない。そう今の便所の横にトタンで出来た小屋があつた様な記憶がある。たぶんボーアイ隊に入つて最初の班集会がその小屋であつせいか、その緊張感や班長の顔などおぼろげながら覚えている。

そして今のハウス長休が出来上がつたのは僕が確かボーアイ隊に入隊して間もなくだつたと思います。その頃の4団・38団のスカウト全員が庭に集まつて、その出来たばかりの小屋の名前をつけるために、幾つかの名前の候補の中から多数決をし、「ハウス長休」と決めた様な気がします。それも圧倒的多数です。

それから10年チョットの間、僕達長休寺スカウトにとって切つても切れないものになつたのでした。組集会・班集会・団会議・地区の会議、その他もう数えられない位の集会・会議をこの一つのプレハブの小屋は見つづけてきました。その間、ハウス自身も少

しづつ変つてきたと思ひます。例えば、まだ真ん中のホールに今の様なジュークボックスが設置されなかつた頃は真冬になれば足の先から冷えてきたままなかつた事をよく覚えてゐる。

そして今、僕のスカウト活動なるものをいのちいろと思い返えすと、そのどれもがハウスの中では、又横で、屋根の上でと、つながつてくるのである。最近では、僕の中でこのハウス長休という建物がある意味で、スカウト活動とイコールで結ぶことさえできる位なのであります。

「四団とサンパチ」

4団 SSSL 玉城 純平

私は、この十一月一日から四日まで広河原野営場で開設されたウッドバッジ研修所SSS課程京都第3期に行つてきた。

最終夜のキャンプ・ファイヤーを終え、サイトに戻つてきた。夕食の食器洗いが残つていたので、まずはそれに取りかかることにしました。その時の事である。食器の底に残つたおかずの汁が動かないのだ。食器を振つても動かない。逆さに向けても動かない。我々がキャンプ・ファイヤーをしていた、ほんの1時間余りの間に、氷が誕生していたのであります。

「或いはサンパチと四団」

4団 SSSL 玉城 純平

R S隊の活動は、私が隊長を担当した當時より打ち出した方針で、月一回ハウス長休での隊集会、隊機関紙「櫻」の発行、年一回の活動報告書の発行、が主なもので、これらは五年間継続して活動できています。服部副長・鶴田副長のおかげもあり、またこれらに参加してくれたスカウト諸君のおかげだと感謝しております。

さて隊R S隊というのは、メンバー構成が学生・浪人生・勤め人等バラエティに豊んでいることもあり、また各隊リーダーとして活動しているメンバーがほとんどであることから、遠征等のダイナミックな活動はどうしても制約をうけてしまいます。このことから、前記活動内容になつた訳ですが、せっかく集まってR S隊として活動するため、何かローバーリングを、と思い基本に帰ることから、ローバーリングトウサクセスを輪読することを続けています。(以降RTSと省略)

輪読していくつも思い、また全員から意見が出るのは「かたい」「理想すぎる」「非現実的」「時代感覚に合わない」といった内容なのです。ただ結果的には、人間が幸福になるために必要なこと、人生という航海は自分で切り開く必要のあること(自分の力)とあるわけです。この「かたい」話を、様々な



仲良くしましょう。

RS隊と私

38団ローバー隊長 大藪 俊一

昭和五十五年三月にR S隊をひきうけてか

ら、気がつくと来年でまる五年が経過するこ

とになりました。当時のR S隊はチーフが掛

さんこと桜井君(元掛村君)で、その他メン

バーは、古田・大嶋・松原・河原・塚上とい

ったメンバーでありました。

現在十一月に新らしく、園田・三田・服部・西村(文)・西脇のメンバーをSSS隊から

(浩)君と、四年の五十嵐君がともにBS隊

向えるとともに、六年も活躍してくれた西村君と一緒に、六年来の活動を振り返りました。西村君は、古田・大嶋・松原・河原・塚上といつたメンバーでありました。

この話はノン・フィクションであり、全て事実に基づいています。しかし、悪意を持って書かれたものではないことをお断りします。サンパチの皆さん、これからも

長休寺スカウト協議会だより

- 協議会が発足し、今までの主とした行事を紹介いたします。

1. 長休寺スカウト協議会十周年記念式典開催

昭和57年5月9日 於：ハウス長休広場

(京都連盟、地区、大谷大スカウトの仲間たち多くの来賓をお招きし、盛大に式典が行なわれました。あと、オリエンテーリングが宝ヶ池・松ヶ崎周辺で行なわれました。)

2. 4団・38団指導者研修会

昭和59年10月7日 於：ハウス広場にて

(両団指導者多数が参加、小川先生のあいさつの後、スカウトの基本であるテントの立て方を実修、あと末吉県副コミの講評と研修を受け、多くの知識を吸収した。この後、両団リーダー協議会員との交流懇親会をなごやかな内に終了し、今後も定期的にリーダー研修会を開催することで確認しました。)

3. 每年の新年の集い・報恩講等

(両団のスカウト・リーダーが交流するのは、年間2回の集いのみとはさびしいものであるが、他に集いを考えている。)

4. 大谷スカウト30周年記念全国大会の開催について

開催場所：京都市内（本願寺→比叡山） 開催日時：昭和60年7月26・27・28日

5. ハウス長休について

8年前の協議会報の中で小川先生は、ハウス（集会所）について問い合わせ投げかけられておられます。その文章を再度掲載し、再考願えれば幸いだ。

「……めぐまれた集会所である事に関連して……掃除もお母様方の御奉仕、破損も協議会がしてくれる。スカウトにあっては無意識的だと思はれるがあまりにも育成会に寄り掛け過ぎてはいないだろうか。少年たちの手で修理可能なものまでも、整理にしてもいつまでも、いつまでも放置されていることは一体どうなのだろうか。早く言えば、スカウト指導の教材が目の前に提示されているにも関わらず、それを見のがして仕舞ってある事に申訳ない事だったと思う。それを通じてのすばらしい教材を生かし得ずには過して仕舞った事は何とも申訳ない。…………ハウスはその根源的な願いは、スカウトの手に依るスカウトの運営の下に行はれねばならない筈のものである。それがいつしか協議会の仕事になって仕舞いそうである。大変な事だと思った。その事はスカウト訓育が、スカウトが一人立ち出来る自活力の訓育プロセスである事。そしてハウスがその訓育のための他團に無いすばらしい教材として提供されているにも関わらず、自分達が責任を持ち、自分達の為の集会所では無くて、集会の便宜のための集会所になって仕舞ってある事を物語ってある現状であると言うことである。

6. 協議会事務局は、両団で隔年ごとに運営を担当しています。60年度は4団となり会計は38団となっています。

長休寺スカウト事務局

協議会報再刊にあたり、両団スカウト、リーダー、デンマザー、育成会の方々には、大変お忙しい中、投稿いただき誠にありがとうございました。お陰をもちまして、会報が再刊できるはこびとなりました。これを機会に定期的に発刊をかさねて、4団・38団の横のつながりをより一層強くし、スカウト、リーダー交流、リーダー研修、情報交換等を主体として、スカウト活動の一役を担っていきたいと考え、又、スカウト、リーダー、育成会の皆様の御意見をいただき、その声を協議会運営に反映し、相互に理解と協力を深め、よりよいスカウト活動が出来る場を多く、提供したいと考えております。

なお、スカウト活動に対する、御意見等を事務局の方へお寄せいただければ幸いです。

生活環境の者が一堂に会して話せ、また小川先生からの意見を聞けるという「場」を作ってくれるRTSは非常に良い材料であるとつくづく感じます。

ローバ隊の年代のスカウトは、海外への派遣のチャンスも多くあり、スカウティングをうまく利用して自分の人生の糧とする活力を持つていて欲しいと思います。月一回の隊集会のたびに、人生の中で重要な時代を生きているスカウトに接し活力を得るとともに、新鮮な気持ちになる機会を持つ私を幸せだと感じております。

今後とも生涯スカウトである道を少しでも広げる役割が出来ればと思い、長休寺スカウトの一員であることを一日でも長く続けたいと思います。

再刊にあたり

三十八団 委員長 西村 泰一

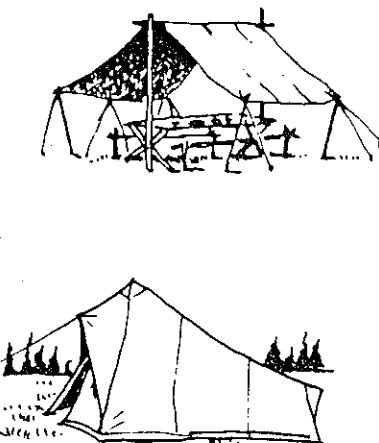
葵ライオンズクラブよりハウスを寄贈いただいて、早や十年が過ぎました。過日、その記念式典が行なわれ、日々スカウト諸君が、ハウスを中心活動している姿を見るにつれて、その存在価値と小川先生御一家の、管理面での御苦労に心より感謝せずにはおれません。ハウスを管理運営するにあたって、当初は

財源もなく、当時の四団・三八団の团委員有志で出資し、又、使用規定等を原田氏（四団元育成会長）宅等で色々話し合った懐しい思い出もございます。

その後、ハウス協議会も立派に一人立ちをし、長休寺スカウトとしての活動に中心的役割をなしている事はよろこばしく思う次第ですが、その後、尻切れトンボで、今度、小川先生の御熱望で、再刊されることになり、これによって、四団と三八団の横のつながりが、更に深まり、共々、スカウト活動が発展することになります様、切望するところで御座います。

「再刊おめでとうございます。」

弥栄



昭和47年10月22日、北ライオンズクラブのご好意により、長休寺のスカウト諸君へ：：とハウスが寄贈されました。以後4団、38団のスカウト達の本部として利用されています。その間、便所、側溝、ガレージ用屋根、自転車置場、水道設備等々がご父兄のご協力により、整備され今日の姿になっています。

私達父兄も又このハウス長休の維持、管理について考えなくてはなりません。ごじの通り、この広場は小川先生のご好意により私達が利用させて頂いています。スカウトの標語にも「来た時よりも美しく」とあります。スカウト達が、父兄が感謝の気持ちでこのハウスを利用したいのです。ハウスの広場には、奥さまの丹精こめてお育ての四季の花々も咲き、スカウト達の美しい心がはぐくまれていくようです。大切にしたいものです。

